



初等部だより 10月号

鎌倉女子大学初等部
令和8年10月1日
第7号

自分で考え行動する力を

部長 大塚 俊明

2学期始業式から早ひと月が経とうとしています。

9月は関東大震災にちなんで防災について改めて考える機会の多い時期ですが、今年は8月末から雨模様が続き、ここ関東地方でも豪雨による大きな被害が頻発しています。特に都市型の内水氾濫は、これまであまり聞かなかったタイプの災害と言えます。

通い慣れた道で自分の車が「あっという間に水没した」という経験談を聞くと、自分はその状況にうまく対応できるのだろうかと不安を覚えます。近年頻発する豪雨災害には、気候変動の影響も指摘されています。私たちは、これまでとは異なる災害への備えを求められているのだと感じます。

「災害は忘れたころにやってくる」という教訓があります。しかし、これほど各地で自然災害が相次ぐ今日、「忘れたころに」ではなく「いつでも」起こり得るものとして考える必要があるのかもしれません。私たちは危険を知らせる情報に繰り返しさらされながら、日常生活を送っているとも言えます。

先日、このような「警戒アラームが鳴りっぱなしの状況」について危惧を述べた論考がありました。そこで指摘されていたのは、「警報を受け取ること」と「危険を感じる」ことが次第に結びつかなくなっていく危うさです。言わば、「危険への慣れ」ということでしょうか。それが危険の過小評価につながり、ひいては避難の遅れを招くという連鎖が起こり得るという警告です。

現在の警戒レベルでは、警戒レベル4までに危険な場所から避難することが求められています。「空振り」を恐れず避難することの大切さも呼びかけられています。

私たちは、常に災害を恐れながら生活続けることはできません。しかし、平素から備えを整え、「危険を感じたから逃げる」のではなく、「あらかじめ決めておいた条件になったから逃げる」という行動を、訓練を通して身につけておくことはできます。

初等部でも、これからの危機管理体制について、いくつかの見直しを進めています。災害時に備えた食料・飲

料水等の備蓄についても、従来の一人3日分から7日分へと大幅に増やし、その補充作業を11月下旬までに終える予定です。また、都内の小学校で発生した火災を受けて、鎌倉消防署による研修を実施しました。これまで当たり前と考えてきた避難方法についても、改めて検討する必要があることを確認しました。特に「非常ベル」が発報した際の児童の初期行動について、現在見直しを進めています。

このようなことを考えていた折、各学級に展示された夏休みの自由研究に目を向けると、子どもたちの研究の中にも、環境や自然と自分たちの暮らしとのつながりを考えたものがいくつもありました。

5年生の研究には、江戸時代の気候について詳しく調べ、当時の寒冷な気候と人々の暮らしとの関係を考えてものがありました。また、チョコレート原料となるカカオの木の伐採と環境保護について考察した研究もありました。そのほか身近な題材を掘り下げながら、環境と生活の関連に目を向けた研究がたくさんありました。

自然環境について知ることは、自分たちの暮らしや安全について考えることにつながるのだと改めて感じます。防災についても、知識として理解するだけではなく、具体的な事例を通して「自分だったらどうするか」考える、実感の伴った学びが大切なるはずです。

10月は4年生の宿泊体験学習、1・2・3年生の遠足と楽しい行事が続きます。校外での活動には、学校の中とは異なる新鮮な楽しさがある一方、安全面ではさまざまな状況を想定しておく必要があります。

災害や事故を必要以上に恐れるのではなく、起こり得ることを想像し、必要な備えをし、その上で思い切り活動する。これは学校の危機管理だけでなく、子どもたちがこれから身につけていく「自分の安全を自分で守る力」にもつながるのではないのでしょうか。実りの秋、さまざまな体験を通して、子どもたちのそうした力も育んでいきたいと思います。